

第一次大極殿院広場の調査

—第551次

1 はじめに

本調査は第一次大極殿院復原にともなう学術調査である。第一次大極殿内庭部に2つの調査区を設定した(図124)。それぞれ東区と西区とする。東区は、奈良時代前半に遡る幢旗の遺構の有無確認を目的として、第一次大極殿院の中軸に南北20m、東西8mの調査区を設定した(調査面積は160㎡)。西区は、第一次大極殿院内庭部の東西に存在するとされる井戸の有無および時期の確認を目的として、大極殿の南西に南北14m、東西12mの調査区を設定した(調査面積は168㎡)。調査は、2015年7月2日に着手し、途中中断をはさんで同年10月2日の埋め戻しをもって終了した。

2 地形と基本層序

両調査区の現地表面下には厚い整備盛土があり、その下位に旧表土、水田耕作土、床土、礫混褐色土(Ⅱ期礫敷、Ⅰ期礫敷)、橙色粘質土、暗褐色土などの造成土、明黄褐色ないし黄褐色粘土(地山)と続く。東区では、礫敷下位の造成土が10~20cmであるのに対して、西区では、その西端で約60cmとなり、第一次大極殿院の中軸から外側に向かって厚くなる。また礫敷については東区ではⅠ期とⅡ期礫敷の間に間層をはさむが、西区で間層をはさまない。遺構検出面はⅡ期礫敷面およびその下位の造成土上面である。上層礫敷面の標高は、東区北端で70.4m、南端で70.2m、西区北端で70.1m、南端で69.7mであり、東西方向は概ね水平であるが、南北方向は北から南に向かって緩やかに標高を下げる。以下、地区ごとに概要を述べる。

3 東 区

Ⅱ期礫敷面を切り込む遺構として、柱穴2基と斜行溝2条を検出し、Ⅰ期礫敷の下位に土坑状の落ち込みを確認した(図125)。以下主な遺構について述べる。

Ⅰ期あるいはそれ以前の遺構

土坑状遺構SK19940 調査区南端の北約3.6mの位置に、土坑状の落ち込みを検出した。調査区中央のボック

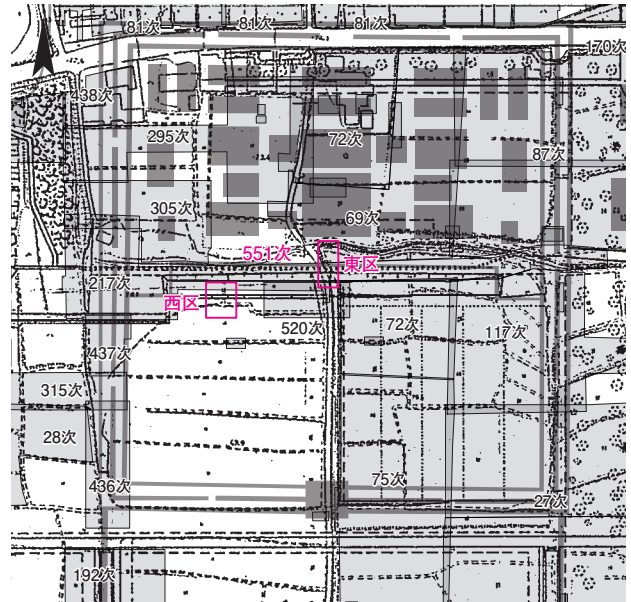


図124 第551次調査区位置図 1:3000

スカルバートにより北端が捉えられず全体規模は不明であるが、北に少なくとも3m以上は続いていると考えられる(図126)。埋土には瓦片を含み、埋土も粘質土と砂質土が混ざることから人為的な堆積と考えられる。

Ⅱ期の遺構

柱穴SP19941 東西約0.8m、南北約0.7mの長方形で、深さ約40cmで、中央やや西寄りに径30cmの柱痕跡を残す。掘方埋土は、黄褐粘土混褐色砂および明黄褐粘土である。

柱穴SP19942 西方の柱穴は、東西約1.0m、南北約1.0mの方形で、深さ約40cm。埋土は、掘方は明黄褐粘土ないし黄褐粘土であるのに対して、抜取穴は黄褐粘土混褐色粘土である。

両柱穴間の距離は大極殿院の中軸をはさんで東西に約3m(10尺)である。両者の大きさや埋土の状況は異なるため、同一の建物に由来する柱穴とは考えがたい。

出土遺物

瓦片がコンテナ2箱分出土した。いずれも小片である。

4 西 区

Ⅱ期礫敷面を切り込む主な遺構として、東西溝1条を検出し、Ⅱ期礫敷下位の遺構として土坑1基を確認した(図127)。以下、主な遺構について述べる。

Ⅰ期の遺構

方形土坑SK19945 井戸想定位置部分(調査区の中央部

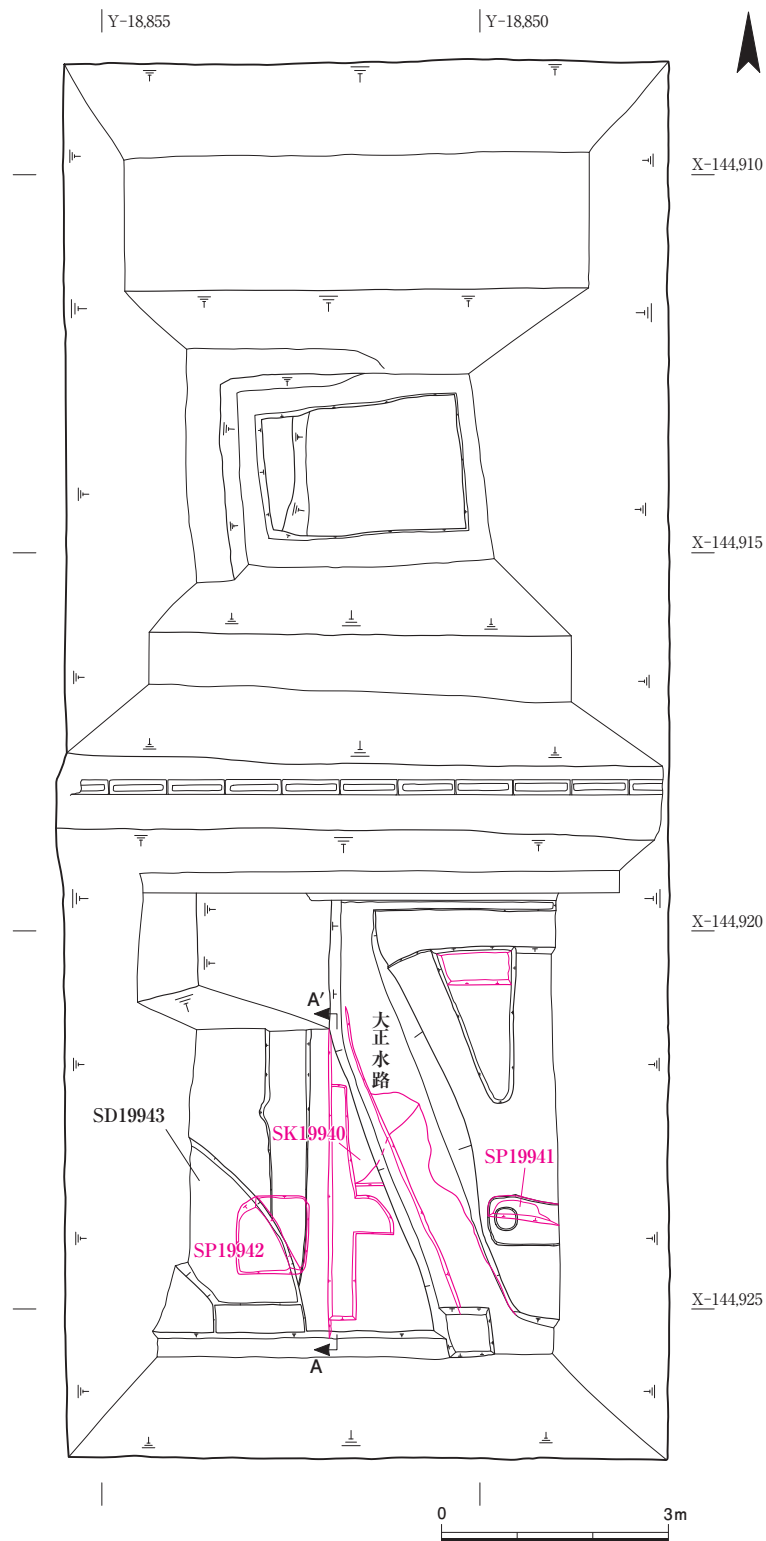


図125 第551次調査東区遺構平面図 1 : 100

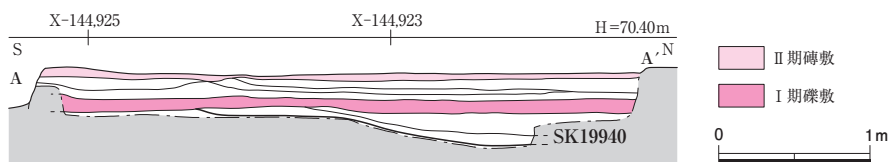


図126 東区A-A' ライン土層図 1 : 50

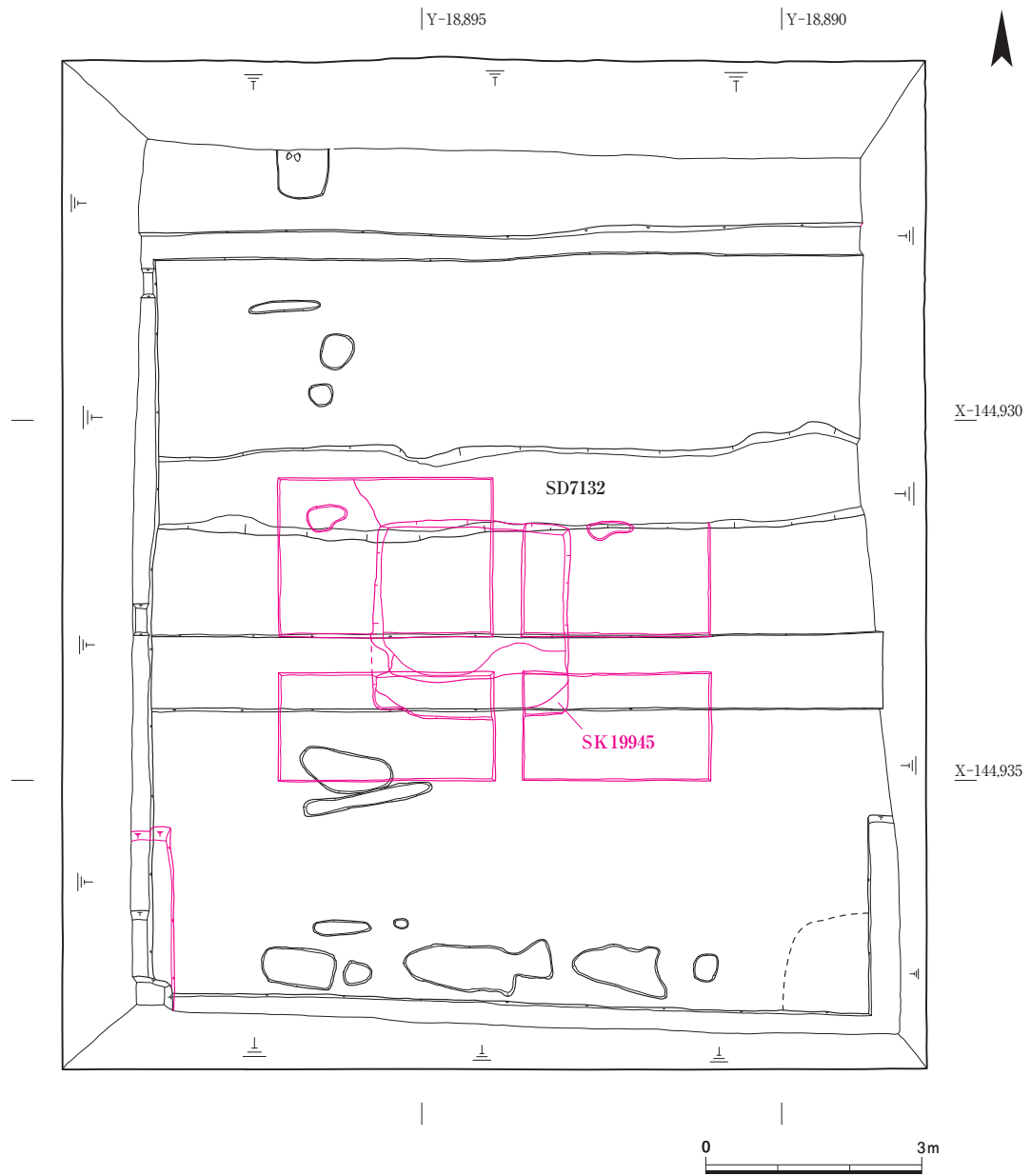


图127 第551次調査西区遺構平面図 1 : 100

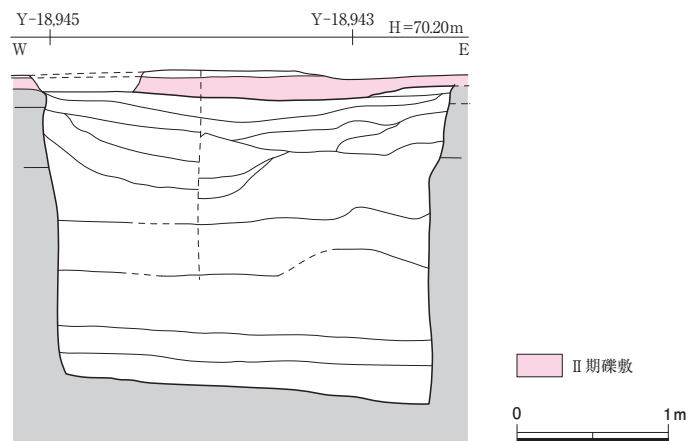


图128 土坑SK19945断面図 1 : 50

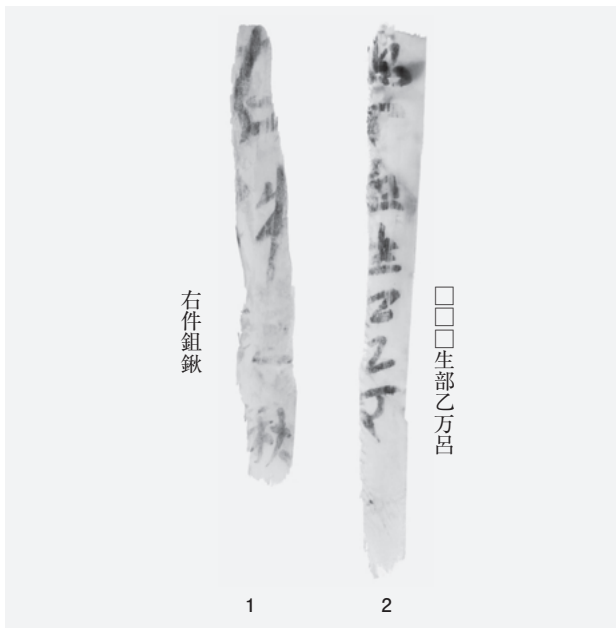


図129 土坑SK19945出土木簡

分)のみ、東西6m、南北4.5m分についてⅡ期礫敷を除去したところ、方形の土坑を検出した。規模は東西約2.7m、南北約2.7mで、深さ約2m。平面形はほぼ正方形で、壁面は直立する。埋土は、大きく上、中、下層の3層に分かれる。上層では、瓦等を少量含むが、検出面から30cmよりも下位の中層からは、ほとんど遺物が出土しない。下層の青色粘土層からは、木簡や燃えさし、檜皮が多く出土した。底面は地山(灰白色シルト)で、井戸枠などの構造物あるいは礫などは認められなかった。埋土上層は皿状に堆積しているが、中層以下はほぼ水平に堆積している(図128)。しまりは概して弱い。埋土の堆積状況からは、井戸枠の抜取痕跡、あるいは据付穴とは考えにくい。

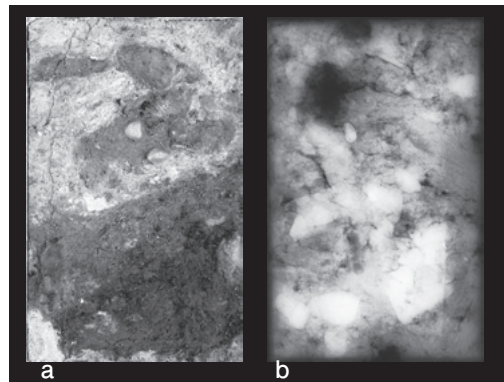
Ⅲ期の遺構

東西溝SD7132 幅1.1~1.3m、深さ約20mの東西溝。約12m分検出した。底面の標高は、調査区東西ともほとんど変わらず69.9mである。これは既調査(第520次調査など)でⅢ期(平安時代初頭)に位置づけられる溝の続きである。平安時代初頭の土器が出土した (芝康次郎)

出土遺物

木簡 83点(うち削屑82点)出土した。すべて土坑SK19945の最下層の埋土である青色粘土層からの出土である。

唯一削屑でない1点は3cmほどの断片であり、墨痕は認められるが判読できない。削屑も、一定程度の意味内容が判読できるのは図129の2点のみである。1は、鋤や鋤の支給または請求などに関わる文書木簡の断片か。「鋤」は「鋤」の異体字。2は人名を記す。3文字目は「壬」の可能性もあるか。末尾の「万呂」は「呂」が大きく省略されている。(山本祥隆)



a: 切り出し試料の層相写真
b: 軟X線撮像による堆積構造画像

図130 SK19945底部の堆積構造

試料番号	木本花粉				草本花粉				シダ孢子				不明					
	ツガ属	ヒノキ属	スギ	オニガシ属	アカガシ属	ヤマモモ属	ハンノキ属	イネ科	イネ属	キンポウゲ科	アリノトウグサ属	イノコツチ属		ヨモギ属	セリ科	ウラボシ科	三葉口	単葉口
③	1	1	1	1	2	1	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	7
②				10			1	1		1	1		4		2	3	3	5
①				1	2		2	1		1	1	6	1	4	2	2	2	5

試料番号	木本	草本	シダ	総数	0%	50%	100%	不明・不能
③	9	3	2	21	43%	57%	0%	0%
②	14	7	8	34	41%	59%	0%	0%
①	5	10	8	30	17%	67%	16%	17%

*数字は粒数を示す

図131 SK19945底部の主体花粉化石群集

方形土坑SK19945底部の堆積環境

土坑SK19945では、井戸枠など、井戸の存在を示すような遺物は出土せず、改めて土坑の特徴や構造を検討する必要が出てきた。そこで地質学的な層相観察をはじめ、地質資料の切り取りをおこない、軟X線撮像やX線CT撮像による堆積構造の検討、さらに花粉および珪藻化石について群集解析を加え、土坑の構造や機能について検討を加えた。

その結果、土坑底部の層相観察および土壌切り取り試料についてのX線構造観察からは、シルトや粘土からなる偽礫の集積構造がみられた(図130)。また水域環境を反映する珪藻化石群は極めて少産であり、花粉化石は木本、草本ともに近隣の植生を反映する一方で、組成には一貫性がみられなかった(図131)。この結果、土坑底部の堆積物は人為による構築土壌である可能性が高いことがあきらかとなった。(村田泰輔・上中央子/客員研究員)

方形土坑SK19945の性格について

西区のⅡ期礫敷下位からは、当初の想定どおりSE7145の第一次大極殿院の中軸をはさんで対称の位置で、井戸の可能性のある土坑SK19945を検出した。改めて、第一次大極殿院の中軸線で折り返すと、両者の位置は見事に一致する(図132)。中軸線と土坑の心との距離は約43m(14.3丈)である。問題は両土坑の時期と性格である。まず、時期についてである。SE7145は、『平城

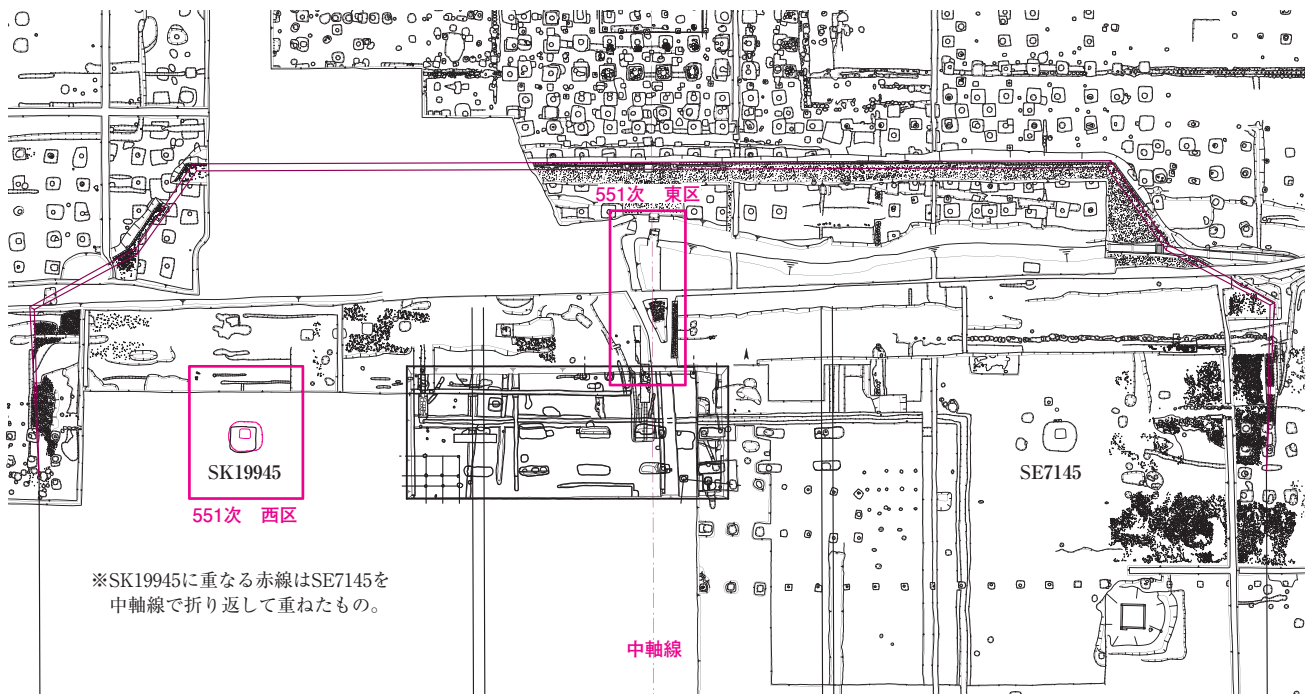


図132 土坑SK19945とSE7145との位置関係 1 : 800

報告 XI』においてはI期に位置づけられているが、『昭和46年度 平城概報』では若干時期が下る可能性も指摘されている。SK19945は前述のとおり、II期礫敷に覆われることから、少なくとも礫敷施工以前には埋没していることがわかる。ただし、正確な構築時期については出土遺物が僅少で不明といわざるをえない。

次に性格について検討する。問題となるSE7145は『平城報告 XI』において以下のように記述されている。「3.5m×3.1mの隅丸方形の掘方で、深さは2.5mである。井戸枠は完全に抜き取られ、版築状にしていねいに埋め戻されている。底部ではほぼ中央に方1mの範囲に木片をふくむ暗黒色砂質土塊があり、その上層の青灰色粘質土上面には檜皮が堆積していた。埋土から少量の瓦片と刀子が出土した。」

SK19945は、一辺2.7mのほぼ平面正方形、深さ2.0mで、SE7145よりも一回り小型である。両者は井戸枠等の構造部材をもたず、その明確な抜取痕跡もない。また、埋土の堆積状況や最下層に木片を含む様相等、共通する点が多い。『平城報告 XI』には記述されていないが、『昭和46年度 平城概報』では、埋土の様相から短期間内に一気に埋められたことが指摘されており、この点も、先に示したSK19945の地質学的所見と整合的である。

これらのことから、両者は類似した性格を有していた

と考えられる。さらに、その位置を加味すると、きわめて密接な関係があったことを強く示唆している。実際の機能については、先述のような状況から、可能性は捨てきれないが井戸と断定することはできない。また、第一次大極殿院前面の広場という位置や、出土遺物の内容から廃棄土坑のような機能も想定できない。現段階では明確な性格については言及できないが、この2つの土坑は、仮設的、一時的な施設であり、機能停止後に一気に埋め戻されたものと考えられる。(芝)

6 まとめ

東区 I期より前の遺構は土坑状の落ち込みのみで、II期以降の遺構は、柱穴2基と斜行溝1条である。下層のI期礫敷を切り込むI期の遺構は確認できないため、少なくとも東区付近には幢旗遺構は存在しないと考えられる。

西区 I期の方形土坑SK19945とIII期の東西溝SD7132を検出した。I期の方形土坑1基は、1辺2.7mの正方形の平面で、深さは約2.0mの大土坑である。この土坑は、第一次大極殿院の中軸をはさんで、SE7145と対称の位置に存在する。埋土の堆積状況等から井戸と断定することはできないが、両者は一連の一時的な構造物であった可能性が高い。(芝)